



クリック 15 号は駄作であったか

藤 本 健 二

クリック 15 号

機関誌クリックの編集・制作には編集委員が携わりますが、15号は全員入れ替わり無我夢中で仕上げることになりました。私も一員として作業を受け持ちました。

当時は、妻が亡くなり悲しみに打ちひしがれていて何事にも取り組む気力がわからず編集会議やメールではほかの委員に背中を押される形でやっと編集に立ち向かう日々でした。原稿はスムーズには集まらず、ページ数を増やすには仕方ないと思ひ私がたくさん寄稿しました。

さて、その15号に対しては厳しい批判もお二人から出されました。会員全員に発信するいわゆるメーリングリスト機能を使われて批評を送信された方と私個人に宛ててメールされた方のお二人でした。おおいに反省しました。ご指摘は貴重な意見であり今回の16号に反映できていれば進歩であろうと考えています。

頑張つて15号を完成した私たちの中には、あまりにも厳しい酷評と受け留めて、もう次はやりたくないと思痴をこぼされる方もいました。トラウマでした。私宛のものも酷評でしたから一度は腹を

たてました。ですが素直に批判を受け容れようと考えなおしています。でもこの私宛のメール内容はなるべく他の委員の方々には伝えずにおこうと思います。トラウマがまた生まれると困ると考えての事です。なにしろ夜を徹して作業を続けられ少なからずポケットから出費して夢中で頑張った者が多いので、その努力などを知っている私には編集委員をねぎらう以外の言葉を知りません。私宛に酷評を書いてくださった方の指摘はここでは説明もしないし反論もしません。



私が編集長を引き受けてしまう状況にいたので私が15号の基本方針を決めました。方針は新しい考えで新しい装丁をするということでした。ページ数が不足する場合は私が記載すると初めから考えていました。ですから投稿が少なくても自分勝手とは知りながらまったく気にしませんでした。ですから批判が出るのは承知で言いますが焦りもしなかつたし悩むことはしませんでした。

しかし他の委員の方々は大いに頑張り

ました。この事は強調しなくてはなりません。

私は反省しました。批判は、ここで申し上げますが上のように自分で決めて進めたのですべて私が捉える事であり批判を受け容れました。つまり 15 号は駄作であったと理解します。駄作であったと私は受け留めるが、仕上げた時の委員の方々の満足した笑顔、自分の宝物だと喜ばれた方、みな喜び感激したのです。

例えば、ここに馬鹿な息子がいるとしましょう。ただ馬鹿だと罵ってよいのでしょうか？つまらない物を制作したからと言って罵倒してよいのでしょうか？努力しないからと叱ってばかりいてよいのでしょうか？

努力して能力を高めた者が、努力せず能力もない人をただ馬鹿だ馬鹿だと罵ってよいのでしょうか？ 平等でもないこの地球文明において能力を高めた人は多く幸運に恵まれたという事ではないでしょうか？自慢する事ではないのではないのか？自分が上手だからと言って人が人を見下げてよいものかどうか？

私は編集長として、編集者の方々と一緒に頑張っって初めてのクリック製作を成し遂げたことに満足しています。それが駄作だとしても、駄作だと批判されても仕事を完遂したことを誇りに思うのです。駄作をもって今までのクリックの歴史に傷をつけたとしてもです。

そして今回の 16 号を皆様にお届けいたします。15 号よりも少しよくなっていたら幸せです。

平成 25 年 11 月 27 日



コラム

編集委員として時間が過ぎていく。気がかりではある。もちろんクリックのことである。委員の皆様と共同で一冊を仕上げるといふ事に楽しみもあるが、兎に角、時間に追われてしまう。

ひとつ素晴らしい特典がある。投稿される方々の人となりが作文に投影されるわけだが、作文を少しばかり精読せねばならないことにある。

伊山さんの「断捨離」を通読して我が身にも差し迫る限りある命を惜しんで、『「断行」、「捨行」、「離行」という考え方を応用して、人生や日常生活に不要なモノを断つ、また捨てることで、モノへの執着から解放され、身軽で快適な人生を手に入れようという考え方、生き方、処世術である』という一説に触れて、背中を押される思いになる。

来期は「断捨離」を進めたい。